ツンな
風紀委員長が
デレる
エロ指導！
ERO INSTRUCTION
CHANGED
FUUKI-CHAIRWOMAN!
立ち読み版
風紀

第一章　モラルVS青春　006
第二章　愛情VS劣情　061
第三章　羞恥心VS絶頂欲　116
第四章　恋心VS男気　167
第五章　風紀VS恋人　217
エピローグ　253

登場人物紹介

Characters

碧坂 愛花（みどりさか あいか）

同級生の風紀委員長で、幼馴染み。
久志のおバカ行為にいつも手を焼いている。エッチなものはダメな主義。

和泉 久志（いずみ ひさし）

学校内でもエロ本の取引を行うような、
男気溢れる健全青少年。

頬に平手を見舞われて帰宅してから、すぐに昼食に取り掛かる。昨夜の残りの冷ご飯を使ってオムライス、それに簡単なスープとサラダを並べると、食欲をそそる匂いに惹かれてか、なんとか愛花の機嫌もよくなったように見えた。

「ん～、美味しかった♥　久志のオムライス、久しぶりだったかも」

「そうだったっけ？　ま、食いたくなったらいつでも来いよ」

などと食後に会話しながら、リビングのソファに並んで座る。借りてきたＤＶＤもセットし、窓側のカーテンも閉めて、薄暗い映画館のような雰囲気も作った。

しかし久志の心臓は緊張でバクバクと脈打ち、手にはじっとりと汗が浮かんでいる。

（くっ、だが負けんぞ！　今日こそ、俺は――愛花をモノにして、童貞を捨てる！）

そのためにこうして愛花の見たがっていた映画を借り、いい雰囲気を用意したのだ。

不退転の覚悟でゴクリと唾を飲み込み、さりげなく隣の幼馴染を見つめる。まだ自宅に一度も戻っていない彼女は、白いセーラー服のまま。黒髪がそのセーラーカラーに流れる姿といい、無邪気に笑う表情といい、疑う余地のない美少女そのものだ。その姿を見ていると、一昨日の行為が思い返され、さらに気分が昂ってくる。

（あ……やばい、すでに半勃ちだ……）

キラキラ光る瞳も、プックリツヤツヤの唇も、久志の劣情を煽っているとしか思えないほどに魅惑的で、思わず股間が隆起しかけてしまう。誤魔化すように座り直しつつも、さりげなく彼女の近くに距離を縮めると、愛花は小首を傾げてみせた。

「ん、どうしたの？　そっちだと見にくい？　詰めようか？」
「いや、大丈夫……あ、それより始まるぜ」
　離れようとした彼女を止めて、制服越しに肌の触れ合う位置に座ったまま、二人は始まった映画に集中する。ストーリーは幼い頃から想いを募らせた少年少女が成長し、恋人となったのも束の間、戦争によって引き裂かれるという物語。
「はぁ……すごい二人ね。小さい頃から一緒にいるのに、相手のこと異性として好きになれるなんて。しかも恋人にまでなって……」
「……忘れてるようなら思いださせてやるが、お前はいま、俺と付き合ってんだぞ？」
「あぁ、そういう設定もあったわね」
　適当に答えつつ、彼女は映画に見入っているようだった。そこで久志は、自分への反応がいまひとつな愛花を少し動揺させてみようかと、さりげなく肩に手を回す。
「っ……ちょっと、久志……ドサクサに紛れて、なにをっ……」
「いいから、ほら……雰囲気って大事だろ」
　右手で肩を抱き寄せると、左手で彼女の左手を取り、自分の脚の上に乗せる。なるべく股間に近い位置だが、それでも肝心の部分には触れさせない。絶妙なポイントに置かれた手を意識しつつも、愛花は耳まで赤く染めたまま唇を尖らせ、ブツブツと呟く。
「ん……ちょっと、強引……バカッ……」
「悪い、けど……愛花が可愛いから、我慢できなかった……」

「なっ、なに、言ってんの……もうっ……」
抵抗の素振りを見せつつも、結局は久志の腕に収まった愛花はさらに頭をこちらに傾け、預けてくる。触れ合った部分から、彼女の鼓動がトクトクと響き、体温が上がってゆくのを感じた。もう一押しかと思い、少し強く肩を寄せ、彼女の頭を優しく撫でる。
「愛花、あったかいよな……こうしてると落ち着く、ほんとに……」
「え、映画に集中しなさいってば……っ」
そう口にはするものの、愛花の声は少し上擦っているように思えた。
（くくくっ、効いてる効いてる……さて、もうちょっと攻めてみるか……）
頭を撫でる指を広げ、髪を梳かしてやりながら、幼馴染の耳に口寄せる。
「髪の毛もサラサラでさ、サテン生地でも触ってるみたいだ……綺麗だぞ」
「なんっ、なっ、ななな……なにっ、バ、バカッ……そ、そりゃあ、ちょっとは気を遣ってるわけだから……そのくらい、当然っていうか……そうだけどぉ……」
絡み合った指にキュッと力が加わり、モジモジと身体を捩り始める愛花。やはり褒められるのには相当弱いらしく、見る見るうちに頬が赤く染まってゆくのがわかった。
「匂いだってさ、ほら……すぅぅ、はぁ……んっ、すげぇ甘い……好きな匂い……」
「んんぅぅっ⁉　やっ、やだっ、ちょっと……それ、やめてって言ったじゃない、お……んっ、うぅ……一昨日、もぉ……」
軽く言い淀み、他の言葉よりも僅かに小さい声で『一昨日』という単語を口にする。一

昨夜のお風呂で、髪や体臭を思いきり嗅がれたことを思いだしたのだろう。それを聞いて久志も愛花の反応を思いだし、ニッと唇を緩めた。

「平気平気、全然気にならない……っていうか、むしろ好きなんだよ、愛花の髪の匂い……なんだろ、シャンプー？　香水？　甘くて、吸い込まれそう……すぅぅぅ……」

左手は手を強く握り、右手では髪を梳くだけでなく耳を撫でたりもする。微かに身体を跳ねさせて反応しつつも、次第に愛花は身体を弛緩させていった。

「ふぁ……んっ、久志ぃ……ほ、ほんとに、も……おっ……」

「ん、なんだよ？　あ、それより映画に集中しないと。愛花が言ったんだろ」

「そう、だけど……やっ、あんっ……んぅ……」

映画の題材と部屋の薄暗い雰囲気がそうさせるのか、彼女の太ももを撫でたりする程度では、もはや抵抗を受けなかった。喘ぐような吐息混じりのささやきに、耳に軽く口づけながら答えると、フルルッと愛花の身体が小さくわなないた。

（おー、いい反応……風呂のときも思ったけど、感度いいよなぁ……）

時折こちらに向けられる視線はすっかり潤み、濡れた唇は半開きになって、熱い吐息が頬にかかる。これはさすがに怒られるか、と思いながら舌を伸ばして耳朶を舐めると、甘い声を上げて擦り寄ってくるくらい、この雰囲気に呑まれているようだった。

すっかり身体も火照っており、汗の浮かんだ肌は手の平を這わせると吸いついてきて、ムッチリと柔らかな肉体の感触を数倍魅力的にしてくれる。

「汗、すごいな……どうする、離れたほうがいい？　そう言われても離れないけど」
「んっ、バカ、久志ぃ……はぁっ、あぅっ、んやぁ……そこ、嗅がないで……」
以前と同じように首筋に顔を埋めて深呼吸すると、羞恥に背筋を震わせた愛花が身を捩る。その仕草がまた愛らしく、久志は腕の力を強くして、キュッと抱き締めてしまう。
「可愛い、愛花……ほんとに好きだ、愛花のこと……んっ、ちゅ……」
「～～～～っっ、ま、またぁ……そんな、こと、ばっか……りっ、んっ……」
頬に、耳に、首筋に。細かくキスを浴びせて彼女の官能を煽り、舌を這わせて彼女の肌の味を堪能する。汗のしょっぱさが舌に伝わるが、彼女ほどの美少女のものならまるで気にならない、むしろ美味しいくらいだ。
（なんか……好きって言ってると、俺までドキドキして……そう思えるんだよなぁ）
「はぁぁ、あぅ……んっ、はっ、はぁんっ……んくっ、くふぅっ……」
もうどこを舐めても、愛撫しても、愛花はピクピクと艶めかしい反応をするばかりで、抵抗の気配は微塵も感じられなかった。ただ、彼女の視線は久志を見ているのではなく、いつの間にか画面のほうへ戻り、まっすぐに向けられている。
（お……？　あぁ、ここか……再会のとこだ……）
戦地にて亡くなったと思われていた男は一年後、喪に服していた恋人のもとへ帰り着き、二人は再会する――それが物語の山場の一つ、しかし重要なのはそのあとだ。
場面は車の中なのだが、溢れる想いをぶつけ合い、二人はそこで初めて結ばれる。その

シーンが非常に濃厚だという話を、なにかの雑誌で読んだ記憶があった。
（たしかに、こりゃわりと濃厚……しかもこの車の位置、周りからも見えるだろ……）
舌の絡み合う音が聞こえてくるほど濃厚なキスシーンとともに、二人は服を脱ぎ散らかして、昼間の車内で身体を重ねている。そんな恥ずかしくもエロティックなシーンに、愛花は熱っぽい視線を送って、モジモジと太ももを擦り合わせていた。
いつもの愛花ならば、顔を真っ赤にして批判し、いやらしいと断じてテレビを消してしまいかねない。それがこの反応となれば、久志も少なからず興味をそそられ、彼女の様子をつぶさに観察することにした。
「んっ、あ……こんな、こんなこと、するんだ……あぁっ、ふぅぅっ……」
浮かされたようにそう呟きながら、彼女の手がギュゥッと久志の制服を握ってくる。ＡＶのようなはっきりとした描写ではなく、局部などを映さずとも艶めかしさを表現するカメラワークと演技が、愛花の想像力を逞しくし、影響を与えているのかもしれない。
「す、ご……んぁっ、あふっ、うぅぅん……あんな、キス……はっ、あんむっ……」
「俺らもしただろ、前に……ほら、いまだって……んっ、じゅる、ちゅぶ……」
あごに優しく指を添えてこちらを向かせ、唇を奪う。前のような遠慮がちなバードキスはすぐにやめ、舌を滑らせて唇を舐め上げると、緩みきっていた唇は簡単に開ききり、彼女の舌が這い伸びてきた。
「あむっ、んぐっ……じゅるるっ、んぁ……はぁ、ひしゃ、し……んむっ……」

首に彼女の腕が絡んで、縋りつくように抱きついてくる。それをしっかり抱き返して、柔らかく唾液塗れの舌を吸い、トロトロと唾液を注ぎ込む。グチュグチュと舌を絡ませながら、愛花は喉を鳴らして久志の唾液を飲み下し、うっとりと瞳を開いた。

「はぁ、はぁぁ……も、だめぇ……映画、とちゅ……うっ、んっ……むちゅ……」

「だめなのはこっちだっての……んぐっ、じゅるっ……じゅろぉぉぉ……んっ、ぷぁぁ……はぁっ、止まれるわけないだろ、そんな可愛い顔見せられたら……」

制服の上から胸に手を這わせつつ、お尻に回した手でスカートをめくり上げ、ショーツ越しの柔尻を遠慮なく撫で回す。両手に伝わる柔らかい感触に、牡欲は瞬く間に甘い刺激を与えられ、すぐさまズボンの中でガチガチに勃起してしまう。

「ふぁっ、ん……久志、こ、これぇ……はぁぁっ、あぅんっ……かた、ぁい……」

映画での男優も獣のように息を荒らげ、女優は甲高い艶声を響かせている。それを耳元に感じているのかゾクゾクッと愛花が背中を跳ねさせ、久志の脚の上に跨がったまま腰を何度も揺さぶっているのがわかった。

ズボンの生地と彼女のショーツが擦れるシュルシュルという音、そこに混じって媚肉の奥から染みだすような、クチュクチュという粘質的な水音が聞こえてくる。唇を曲げて笑い、久志はお尻を撫でる手を脚の間に滑り込ませ、指を伸ばして淫裂をなぞる。

「んくぅぅっ……あっ、ひゅっ……んっ、ひさ、あぁっ……」

「愛花の身体、どこもかしこもあったかくて柔らかいけどさ……ほら、ここ……ここだけ

特に熱くて、指がグチュグチュになっちまう……なんでだろなぁ？」
「んぁっ、はっ、わ……わかん、な、いぃ……いぁっ、はぁんっ！」
カァァッと耳朶を真っ赤に染めて頭を振る愛花、羞恥に包まれたその顔を引き寄せて、音高く唇を吸い上げた。驚いて背中を跳ね上げる幼馴染だが、唇を遠ざけたりはせず、むしろ積極的に口を重ねてくる。互いの口内の温かさを舌で堪能し、泡が立つほど撹拌された唾液がグチュッ、ジュブゥッ……と口端からこぼれ、あごに滴ってゆく。
「んぐっ、じゅるるっ、じゅぶっ……んぐちゅっ、ちゅぶっ、んぶちゅぅ……」
愛花は自分の口から奏でられる卑猥な水音に、羞恥心と官能をいたく刺激されているらしかった。恥ずかしげに鼻息を荒くして、それでもいやらしいディープキスを止められず、しかも腰を振る速度がさらに速くなり、グイグイと強く膝に押しつけられるのだ。
（はぁん、これは……股間を弄られて感じてるのを悟られたくないから、キスで感じちゃったことにしてしまえ――ってことか）
意識してか無意識になのか、それでもこの状況で女性の慎ましさを忘れまいとする彼女の行動は、とてつもなく愛らしく、そして淫らに感じられた。
（けど、それだともったいないよなぁ……）
愛花にはもっともっと自覚して欲しい。毛嫌いさえしなければ、どこまでも貪欲に淫らな妄想ができて、快感によがることができるのだと。
（ま、俺みたいな童貞でどこまで教えられるかわからんが……やってみるか）

舌を尖らせて唇に挿入し、まるでセックスのようにジュボジュボと抽挿を繰り返して口唇を愛撫し、口内粘膜を深くまで弄ってゆく。ンンッ、とくぐもった声を響かせる愛花を無視し、頭の後ろを強く押さえて身体ごと抱き寄せ、彼女の腰を膝の上から股間の上へと移動させた。

「あむっ、んっ、ちゅぶぅぅぅ……じゅぶっ、ちゅぶっ、ぢゅぶるぅぅぅ……」

甘い唾液を啜り上げて、屹立で彼女の淫裂をショーツ越しにつつき、その快感をリンクさせるように、唇を舌で犯す。抵抗が強くなるかと思ったが、ピクンッと小さくお尻を震わせただけで、愛花は恐る恐る腰を押しつけながら、両手を久志の背に回してくれた。

（おぉぉ……なんか、かなりエロいぞ、これは……）

右腕で腰を抱き、もう片方の手はセーラー服の裾から滑り込ませ、ムニュムニュとブラ越しの乳房を捏ね回してやる。んふぅっ、と蕩けるような息を吐いた彼女からの抱擁が、さらにきつくなった。胸元からの刺激で勝手に力が入ってしまっただけのようだが、もっとして欲しいというおねだりのように思え、久志は指の動きを激しくしてゆく。

――フニュゥゥゥッ……クニュッ、ニュムッ、モミュゥゥ……

「おむぅぅぅっ、んむっ……ふみゅっ、んぐっ、じゅっ……じゅるるぉ……っ」

指の間で乳首を挟むように手を押しつけ、けれど屹立したその部分には触れず、まずは柔らかな乳球の感触を愉しみながら、円を描いて乳房を揉みしだく。ほとんど力など入れなくても、吸いつくような肌に指が飲み込まれ、たわむ乳房に根元から扱かれた。

「そうか？　これが愛花の持ち味だし、俺は可愛いと思うけどな」
「ちょちょっ、ちょっと、和泉く――う、うぅ……」
片方の手で愛花の股間を苛めつつ、さらに片方の手では級友と恋人のように手を繋ぐという贅沢なハーレム状態に、自然と頬が緩んでしまう。だが、その幸せな時間はすぐさま終わりを告げた。
「ん……？　あっ、電話だ……ごめんっ、ちょっと待ってて！」
不意に携帯が鳴り、それを見た仁科が通話のために席を外す。声を上げそうになっていた愛花はホッと安堵のため息を吐くが、これは久志にとってもチャンスだ。ここから本格的に、隣の幼馴染を弄ることができるのだから。
「いやぁ、危なかったな、愛花？」
「んぅっ、な、なにが、よぉっ……んひっ、あっ、ひゃっ……んくぅぅっ……」
二枚の布地の上から触ってもすぐにわかるくらい、硬く勃起した肉真珠を指で挟み、布地で優しく包んで転がすと、丸まった彼女の背中がビクゥッと跳ね上がった。
「んー？　だからさ、仁科にいつまでも質問責めされなくてよかったなって。あとは……こーんなことしてても、気づかれずに済むし？」
「ひゃぅぅっ!?　んっ、んやぁぁっ……あはっ、はぁぁっ……だ、だめ、だってば……あっ、んぁぁっ！　うっ、くぅぅっ……こ、こんな、場所ぉ……でっ……んくっ！」

パンストをずり下ろして、剥きだしになったショーツの裾から指を捻じ込むと、蕩けきった媚肉が一瞬にして指に吸いついた。ニチュ、クチュ、グチュゥゥッ……と淫らな音を響かせて絡みつく肉襞を、二本の指で押し開き、愛液を擦り込みながら奥の桃色粘膜を指の腹で引っ掻き続ける。

――グチュルゥゥッ、チュブッ、クチュクチュゥゥ……ニチュ、ズチュゥゥ……

「いひぃぃぃっ、ひぁっ、んっ……ふぅぅっ、ひひゃっ、りゃめ……ひぅぅっ！」

膣口に挿入はしないまま、何度も何度もピンク色の柔肉を弄り、親指の腹では肉豆をゆっくり撫で回す。コリコリの感触が指を強く押し返す弾力を楽しんでいると、ここが喫茶店の中だということも忘れたように、潔癖だった風紀委員長は淫らな喘ぎを吐き、ガクガクと腰を揺すって快感に飲み込まれてしまっていた。

背中を丸めて伏せた顔を無理やり上げさせると、もう唇の周りはこぼれた唾液でベトベトになり、緩みきっている。そこに逆の手の指を添わせると、垂れ伸びた舌が自然と蠢き、ペロペロとしゃぶり上げてくる。

「ふぁっ、ひゃむぅぅ……んじゅっ、れろぉぉ……ふぁ、へ……んぁぁ……」

「おーい、愛花さん？　自分がどんな顔してるか、わかってますかー？」

ツリ目がちだった瞳は目尻をすっかり下げており、紅潮した頬には牝の色香がたっぷりと詰まっていた。吐きだされる吐息には花のような甘い香りが溢れ、久志を誘惑するように、唇がプルンッと震えて光を放つ。たまらず唇を重ねると、口内に溜まっていた彼女の

唾液がこちらに流れ込み、ドロリとした感触が伝わる。
「おむっ、んじゅるっ……じゅるるる、れりゅっ……んっ、ふぁ……」
丁寧に唾液を啜り、舌を絡めて数秒のディープキスを終わらせる。唾液糸を引いて唇を離すと、脱力した彼女の肢体が崩れ、久志の胸元に寄りかかってきた。
「ひ、ひさぁ……し、んっ、もっ、もぉぉ……んっ、ふぅっ……ふぁっ、あんっ♥」
キャミソールの下から手を突っ込み、胸元を弄ろうとして、ようやく気がつく。
「おおっ……って、おい！　愛花、ブラはどうしたんだよ……」
「っっ、そ、れは……～～～～～っ、し、知らない……ひぃんっっ！」
キャミソールの下にブラはなく、揉みしだいた瞬間に手の平に触れた乳首が、ムクムクと硬くそそり立つ。押し潰された乳突起は白柔肉をたわませて埋まり込み、そのまま手を動かして円を描くと、愛花は悲鳴を上げて小刻みに震えた。
「……もしかして、俺が言ったからか？　もっとして欲しかったら……って」
「ひふんっっ⁉　んっ、ひっ、ひがっ、ふぅぅ……うぁっ、はぁぁんっ……」
乳房から手を浮かせ、彼女の四肢が弛緩した隙を突いて、乳首をキュッと摘み上げる。刹那、指で擦っていただけの膣肉奥からピュルルッと蜜飛沫が噴きこぼれ、手の平に温かなヌメりが広がった。ショーツから指を抜き取ると、ホカホカと湯気を立てた彼女の甘酸っぱい牝臭が鼻先をくすぐってくる。
「……すっごい匂いだぞ、愛花。夏なのにパンストなんて穿いてるから、汗でムレムレだ

……それに、マン汁で濡れまくってるしな」
「〜〜〜〜っっっ、う、うううう、うる、さ……ひぃっ、へ、へん、らぁい……」
視線を鋭くして睨んでくるが、汚れた指を彼女の唇に突っ込んでも、さしたる抵抗も受けずに舐めしゃぶられる。悔しそうな彼女の顔をニヤニヤと眺めていると、さらに悔しそうにして羞恥を露わにしながら、瞳を潤ませてなにかを訴えてくる。
「そ、れで……その、どう……す、するのよぉ……んっ、くぁぁっ！」
（さーて、どうするか。このまま愛花をイカせるつもりないんだけど、俺も試着室から勃起しまくりだし……いい加減なんとかしたいんだが……おっ）
少し考えてからあることを思いつき、愛花の耳に口寄せてささやく。
「続きしてやってもいいけど……その前に、俺のほうも気持ちよくしてくんない？」
「んぇ、へ……っっ⁉　ちょ、ちょっとぉ……こんなとこで、なにっ……」
トロンとした彼女の瞳が一瞬だけ大きく見開かれるも、視線は久志の股間に釘づけになっていた。ズボンのファスナーを開き、トランクスの前開きから突きだした肉勃起を前に、愛花は耳まで赤くなって、久志の顔と股間を交互に見比べて狼狽する。
「そん、な……だめでしょっ、こんなの……見られちゃうっ……」
「ま、端っこの席だし大丈夫だろ。それよりほら、して欲しいんなら愛花が先にしてくれよ……早くしないと、仁科が戻ってきちまうぞ？」
キャミソールに突っ込んだままの手で乳首を優しく捻って催促すると、覚悟を決めたよ

うに唇を引き結び、ブルルッと身体を震わせてから、愛花が上体を沈めてゆく。
「ちゃ、ちゃんと見張っててよっ……くっ、うぅぅ……こんなに、おっきくして……」
愛花ほどではないが、こちらのズボンの中も相当に蒸れていたはずだろう。すえた汗の臭いと性器の牡臭さが彼女の鼻腔を直撃し、眉がひそめられる。
「ほら、は・や・く、は・や・く！　昨日、教えた通りにさ……」
「〜〜〜〜っ、わかってるわよっ……んぁ……はぁぁ……あむっ、んぷぅ……」
大きく口を開き、上目遣いでこちらを見つめたまま、唾液をたっぷり乗せた舌を限界まで伸ばし、口腔に亀頭を飲み込んでゆく美少女幼馴染。その表情と艶めかしい舌の色を見ただけで、もう射精してしまいそうなほど興奮してしまう。
（おぉぉ〜〜〜っ、やっぱ覚え早いなぁ……）
昨日の説得の際、トロトロになった愛花を言い包めてフェラさせたときとは違い、今日の愛花はまだ理性を保っているところが、また劣情を誘う。彼女がなにも知らないのをいいことに、こうするのが普通だと言ってこちらの目を見ながらすることや、咥える前に舌や口の中を晒すようにと教えたのは正解だった。濃厚な汗臭と蒸れた味に、目を白黒させてむせ返る、悔しそうな彼女の表情を存分に堪能できる。
（しかも、唾液たっぷりでヌルヌルっ……くぅっ、超気持ちいい！）
「おむぅぅ……んりゅっ、じゅちゅぅ……れりゅっ、んぷっ……ぐちゅぷ……」
ザラついた舌の感触が、唾液を潤滑油にヌルヌルと亀頭を這い回る。それと同時に柔ら

かな肉厚リップが大きく円を描き、肉幹を締めつけて扱き立ててくる。さらに口内の熱い粘膜が肉棒に絡みつき、チュポチュポと卑猥な水音を奏でだした。

――ズリュウウッ、グプッ、ヌプウウウッ……ジュルルッ、クポッ、グプゥ……

「お～、エロい音……おぉ？　こっちからもしてるなぁ～♪」

「んんぅぅぅっ、んぷぁっ……ちょっと、だめっ……んっ、くぁぁっ、ふみゅっ……」

久志の股間にしなだれかかる愛花のスカートをめくり、ムッチリと膨らんだ双臀を片手で揉み捏ねる。その瞬間、布地とお尻の間からクチュ、グチュゥ……と音が響く。

大量に溢れた蜜汁はショーツもパンストもびしょ濡れにし、座っていた座席まで湿らせるほどだった。当然、スカートの内側まで恥ずかしい染みが広がっている。

「ふぁぅぅぅっ！　んっ、さ、さわっひゃ、やっ……んぅぅっ……」

彼女自身の牝液を美尻に塗り込めながら、緩んだ淫裂をなぞり擦る。強く押し込むと、瞬く間に新しいエキスが奥から溢れ、布地を貫通して染みだしてきた。迸る快感に翻弄され、瞳をうっとりと蕩けさせた彼女は、口奉仕にもまるで集中できないでいる。

「ほれほれ、ちゃんとしゃぶってくれよ、愛花……この、エロい唇でさ」

「ひゅぁぁぁ……んむっ、むぃぃ……こ、これ、されっ……てぇっ！　されて、たら……はぅっ、んぅ……お、オチンチン、噛んじゃい、そ……らもん……んぇ、れろぉ……」

まるで自宅のベッドでそうしているかのように、周囲の状況も気にせずペニスに頬擦りし、舌を這わせてくる幼馴染。しかもそれでいて、イタズラしている久志のことを心配し

て、奉仕を遠慮している――そのいじらしさに、一気に昂ってきた。
「……ンっとに、なんでそんな可愛いかなぁっ……」
「ふぇっ……んぐっ、むぅぅぅっ⁉　あぐっ、ひひゃっ……おむっ、ちゅぶぅぅっ！」
そのいじらしさが、久志をイカせたあとに自分もイカせてもらいたいという欲求からきているのか、それとも真にこちらを想ってのことなのかはわからない。ただ、込み上げた劣情を目の前の少女に世話してもらいたくて、久志は愛花の頭を押さえつける。
「はぁっ、んぅっ……やっべ、これ、めっちゃくるっ……くっ、すぐイクぞ……っ」
「おごっ、おむぅぅぅっ、んぐぷっ……ふみゅっ、じゅるっ、ぐぽぉぉっ……」
彼女を弄る手を休め、固定した彼女の喉を目がけて亀頭を叩きつけるように、一心不乱に腰を振ってしまう。周囲に客があまりいなくて、本当によかったと心から思えた。
息が詰まり、喉を抉られるような衝撃にむせび、涙を浮かべながらも、愛花は舌をくねらせて裏筋や肉傘を丁寧にしゃぶり、頬肉を窄めて肉幹への刺激をタイトにしてくる。ペニスの半ばから先端までを美少女の唾液に染め、柔らかく熱いトロ肉で扱いてもらい、まっすぐに見つめてもらう――背徳と羞恥と快感に下半身が包まれ、一気に精嚢から射精欲が突き抜けてゆく。
「あぃっ……イ、クッ……イクぞっ、愛花ぁ……はぅっ、うぅぅぅっ……」
――ビュクゥゥゥッッ……ビクビクゥゥゥッッ！　ビュクッ、ドピュビュルッ！
「んぐぅぅぅぅっっ⁉　んぷっ、おぶぅぅぅっ……んぐっ、ぷぅっ……ごぷっ……」

目の眩むような快感に、腰がガクガクと震える。それでも、愛花の柔らかな唇と粘膜でたっぷり扱かれては射精が止まることなどあり得ず、二度三度と腰を揺すり、彼女の喉奥へ濃厚な精をたっぷり排泄してゆく。
「くはっ、あっ……はぁぁ……おっ、うっ……ラスト、くぅぅっ……」
「おむぅぅっ……んっ、ぷっ……ふひゅぅぅ……んっ、ぷぁっ……はぁっ……」
最後に括約筋を締めつけ、尿道の奥底に詰まっていた残滓を搾りだすと、ようやく快感の波が治まった。だがまだ終わらない。教えておいた通り、愛花は喉奥まで詰まった精液に目を白黒させながらも舌をくねらせ、レロレロと丁寧に肉幹を掃除し、ゆっくり唇で扱いてペニスを抜いてゆく。
「んぐっ……んふぅぅっっ、ふむっ……んじゅっ、じゅろぉぉぉ……ほぉっ、んっ……」
頬を小さく膨らませて、口端から垂れる唾液であご先まで濡れ光らせた美少女が、ようやく顔を上げた。鼻で荒い息を吐き、少し険のある視線で恨みがましく睨んでくるが、精液を口に含んでいては文句も言えないらしく、緩慢な動きでハンカチを取りだし、唇の周りを拭いだす。久志もモノをズボンにしまいながら、彼女の頭を撫でて礼を告げる。
「はぁ、気持ちよかった……ありがとうな、愛花」
「っっ……ひょ、ひょんら、ころよりぃ……あ、あらひは……」
ぷぁっ、と唇を開いた瞬間に、こもった精臭が一気に溢れてきた。それが自分でもわかったのだろう、愛花は頬を赤くして慌てて口を閉ざし、今度はティッシュを宛がう。

「おわっ、待て待てっ！　もっかい口開けろって……ちょっとでいいから」
「んぐっ……んっ、はぁ、ら、らりよぉ……こんにゃ、くひゃくれ……んぷっ、へんら、あじぃ……はやふ、ひゅへはい、ろにぃ……んぁっ……」
唇の上下に白濁した粘糸が引き伸ばされ、舌で撹拌された精液塊が口内でクチュクチュと泡立ち、ドロリと波打っているのが見えた。上の口がそんな有様でありながら、早くアソコを弄ってもらいたいというように脚を擦り合わせ、小刻みに身を揺すっている幼馴染の痴態があまりに艶めかしくて、久志は思わず彼女の耳にささやきかける。
「口ン中、俺のでいっぱいだぞ？　こんな場所でフェラ抜きしちゃうなんて、随分エロくなったよなぁ、愛花も……もしかすると、見られてたかもしれないのにさ」
「んっっ、〜〜〜〜〜〜っっ……ひょ、ひょんらろ、あらひの、ひぇい、りゃ……」
カァァッと耳まで赤く染めた愛花が俯いて恥じ入り、膝の上で手をキュッと握る。反論できない己の醜態を思いだして、怒りと自己嫌悪の檻に閉じ込められているようだ。
（おーおー、めっちゃ真っ赤になってる……すげぇ可愛いなぁ、こいつは）
普段が普段なだけに、こうして殊勝な姿を見せるのは新鮮で、牡欲をそそるものだ。が、そんなことを考えてズボンの中を再び熱くしていると――。
「ははっ、お待たせ〜……あれ、どうしたのさ、二人とも？」
「――っっっ!?」
気配もなく不意に戻ってきた級友の言葉に、心臓が飛びだしそうになる。

自分から避けた話題を彼女にさせてしまったことは、かなりのマイナスだ。
とはいえポジティブに考えれば、彼女のほうから話を振ってくれたのはありがたい。せっかくの誘いを無下にして、これ以上のみっともなさを見せるわけにもいかなかった。
（とにかくっ……まずは、ちゃんと仲直りできたか確認する……よし、それでいこう）
そうと決まれば迷いは禁物と、簡単に支度を済ませ、家を飛びだす――と。
「あっ……は、早かったんだ……ごめんね、いきなり……」
「お、おう……いや、いいって、別に……」
すでに待っていた愛花からかけられた殊勝な言葉に、ついついしどろもどろになってしまう。しかもよく見れば彼女はまだ制服のままである。
「あれ、着替えてないのか？」
「えっ……う、うん。ちょっと準備が大変で、着替える時間が……それより、行こっ」
準備？　――と首を傾げるよりも早く、シャツの裾を摘んだ愛花が歩きだす。
「おい、ちょっと……どこ行くんだよ」
「き、決めてないけど……人のいない場所のほうが……あ、それじゃマル公園は？」
それは幼稚園のころよく遊んだ公園の通称。敷地が円になっているから、マル公園――このくらいの時間なら子供もおらず、立地のせいで帰路に立ち寄る者も多くはない。
（あぁ、あそこか……たしかに、人はいないだろうし、話するにはもってこいだな）
歩いて五分ほどのところに、ひっそりとその公園はあった。もちろん昼日中であれば子

供たちの声も騒がしいのだろうが、いまは人っ子一人いない。
「なんか、久しぶりよね……ここに来るのも」
「そうだな。おー、懐かし……うわっ、ブランコ低っ！」
二つのブランコに並んで腰かけ、愛花の言葉を待つ。こちらから話をするべきかもしれないが、きっかけが掴めず、ただ沈黙に身を委ねる。
「……ありがとね、久志」
すると、やがて愛花がささやくようにそう口にした。
「ん、あぁ……どうしたんだよ、いきなり」
「だって、まだお礼言ってなかったし……それどころか、勝手なことなんて言って……」
下校中に叫んだときのことだろうか。そんなことは気にもしていないが、愛花の中でそれはなんとも礼儀知らずだと、恥じ入るべき点だったらしい。
「ごめんね……本当は、すごく嬉しかった。あのままだったら、アタシ学校行けなくなって、やめてたかもしれない……久志はアタシの恩人なの。だから――」
そこで愛花がふとこちらに顔を向け、これまで見たことがないほど自然な、そして柔らかな笑みを浮かべた。
「だから――ありがとう。それと……」
「っっ……お、おいっ、なんだよっ……」
愛花の小さな手が伸びて、ブランコの鎖を握る久志の手に重ねられる。

「学校にあんなオモチャ持ってく、アタシみたいにエッチな女の子を……好きになってくれて、本当にありがとね。アンタのこと、好きになってよかったわ」
「はっ、え――えなっ、なにっっ⁉　おい、おまっ……いまなんつった！」
サラリと、あまりにも滑らかに口にされたせいで、聞き逃してしまうところだった。だが間違いなく彼女は伝えてくれたはずだ、自分の告白に対する答えを。
思わず硬直していると、愛花が身体を倒して下から、こちらの顔を覗き込んできた。
「あははっ、なによその顔っ！　おっもしろーい、すんごい取り乱しちゃって♪」
「いやっ、そうじゃなくて！　いまのって、その――んぅっ！」
沈みかけた夕陽に伸びる二つの影が、一点で重なり合う。キィッ、とブランコの軋む音をどこか遠くに聞きながら、久志は押し当てられた唇の甘く柔らかな感触に意識を奪われながらも、重ねられた彼女の手をしっかりと握り返した。
「んちゅぅ……ちゅむっ、んっ……」
「ちゅぶぅぅ……くちゅ、んむぅぅ……あむっ、んじゅぅ……」
どちらからともなく舌を伸ばし、すぐさまグジュグジュと唾液を絡めて口づけを交わす。実に一週間ぶりのキスは、記憶に残るそれよりも甘く、心に染み込むような温かさだった。想い人と気持ちが通じ合った喜びに感じ入りながら、激しい口技で何度も彼女の口内を味わい、互いの舌を熱く火照らせ、トロトロの甘露を啜り上げる。
（愛花と……本当に、恋人に……っっ、もっと大事にするからな、愛花っ……）

「んふぅっ、ふぁっ、んむちゅっ……ぷぁぁ、ひしゃ、しっ……んくっ……」
スンスンと鼻息を鳴らし、それを恥じ入るように頬を染めた彼女が薄眼を開けて、話しかけようとした。それを遮って唇の隙間を塞ぐと、久志は柔らかく舌を使って唇全体を舐め回しつつ、啄みのようなキスを小刻みに浴びせる。
瞬く間にベトベトになった唇を、数分の口づけを終えてからようやく離すと、すでに愛花の表情はあのときと同じ――玄関先での行為のときと同じように、うっとりと桃色に染まり、完全に欲情しているようだった。
「んっ……はぁぁ、なんだよ愛花……めちゃくちゃエロいぞ、その顔……」
「ぷぁっ、はぁっ、あぁぁ……んっ、そんなの、仕方ないわよ……久志が、エッチなキスするからぁ……んくっ、ふぅぅっっ……」
不安定なブランコから立ち上がった彼女が、ガクガクッと膝を震わせて倒れ込みそうになる。慌ててそれを支え、近くのベンチに座らせようとするが――。
「だ、めっ……ひぅっ、んっ……こ、こっちに、来て……木の、陰のほうでっ……」
モジモジと内ももを擦りつけて悶えながら、覚束ない足取りで愛花が茂みのほうへ、腰を突きだした格好でヨタヨタと歩いてゆく。スカートに浮き上がる尻肉を堪能しつつ、久志が後に続くと、周囲から見えない場所でようやく彼女が、地面にへたり込んだ。
「くぁぅぅっっ……んはっ、あっ……はぁぁ……」
（すっげ、キスだけでこんな――って、そりゃないだろ。いったいどうしたんだよ……）

荒い息を吐く彼女の様子は、度を超した発情ぶりだった。まだ胸もアソコも、お尻だって弄ってはいないのだ。にもかかわらず、愛花の瞳はトロンと目尻が下がって潤んでしまい、美味しそうなプルプルの唇は半開きになり、甘い吐息が香ってくる。

「んっ、も……もぉ、バカぁ……あっ、ふぅっ……こ、告白、したら……お家で、しようと思ってぇ……準備、してたのにっ……だい、なしっ……よぉっ……」

そう怒りながらも笑みを崩さず、彼女は手が伸ばしてなにかを手渡してくる。

「ん、なんだよ……っっ⁉　ってお前っ、これ……は……おい、まさかっ！」

受け取ったものを見て、思わず息が詰まる。すぐさま彼女のほうを向くと、羞恥と興奮で耳まで赤く染まった愛花の顔は、フイッと横を向いて視線を逸らしてきた。

だが下腹部に視線を向けると、なにかを堪えるように両手は膝の上でキュッと握られ、内股に崩して座った脚は、小刻みに震え続けている。

（……まさか、ここまでハマるとはなぁ……こいつが元々エロかったのか、俺のせいでここまでエロくなったのか……）

呆れたような嬉しいような、複雑な感情を抱えて久志は手の中の器具を見つめる。

それは久志がプレゼントし、今日まで彼女が学校で愛用していたと思われる、例の五段階ローターのリモコンスイッチにほかならなかった。

（ま、そういうことなら……彼氏として、しっかり協力してやるか）

少し前までは自慰の経験などなかった彼女を、学校での行為に耽るまでエッチにしてし

まったのだ。彼氏としてその欲求を満たしてやるのは、ごく自然な行為である。
「ふぅん……なんだよ愛花、告白の返事しようってときに、こんなの仕込んでたのか？まったくどうしようもないエロ女だなぁ、愛花は……よっ！」
――ブィィィィッ……ブゥゥゥゥ――ゥゥンンッッ……
「ひぁぁぅぅぅぅっっ⁉　んぁはっ、やはっ、いきなっ、りっ……ひぃぃぃんっっ！」
ＯＦＦの状態から一気にマックスまで威力を高めてやると、へたり込んでいた愛花の脚が中腰になるくらい跳ね上がり、バネでもはめ込んであるかのように、ガクンガクンと上下に激しく痙攣した。ショーツから染みだした蜜液がポタポタッと地面に落ちる、その様子に官能を揺さぶられ、久志は愛花の身体を支えるように抱くと、ムッチリと柔らかな質感を湛える尻房を揉みしだく。
「んはぁぅぅぅっ……んらっ、めへぇぇ……お、お尻、だ、めっ……んぅぅっ！」
「なーんでだめなんだよ……あー、やっぱ気持ちいい、愛花のお尻……」
指先が他愛もなく肌に沈み、まるで乳房を弄っているような柔らかさに包まれた。そのままお尻を持ち上げて身体を支えながら、涎の垂れ流れる唇に吸いつき、ヌルヌルで熱々な口内粘膜に舌を強引に捻じ込んでゆく。
「ぐぷぅぅぅ……じゅるっ、んぐっ、ちゅぶぅぅぅ……れりゅっ、ぢゅるるぅっ……」
引き締まった唇に扱かせながら、抽挿を繰り返してあちこちの粘膜を弄り、尻を大胆に揉み捏ねる。それだけで愛花の全身が大きく震え、ビクゥゥッと反り返っていった。

「ほむぅぅっ、おむっ、んっ……ぐぅぅぅぅっっ！　ふぅっ、んんぅぅぅ――っっ！」
彼女の手が久志の腰に回り、強く強く、想いを伝えるように抱き締められる。数秒ほども身体が跳ね、唇から力が抜けた頃を見計らい、舌を抜いて唇を離す。
「ふぁっ、はっ……あふっ、あはぁぁ……はっ、ひ、しゃ……しぃ……んっ……」
暑気に当てられただけではない、性的興奮に昂った幼馴染の肌には、大粒の汗が滲んで上気していた。そこから立ち上る甘い香りにゾクゾクと背筋が痺れ、久志は我慢できないとばかりにスカートの内に手を滑らせると、ショーツを引きずり下ろす。
「うっわ、なんだこれ……もう穿いて帰れないよな、これじゃ？」
「う、んぅ……ぁっ、や、やだっ、やめてよっ……」
濡れているのを証明するように手を広げると、粘液の糸がベトォッ……と引き伸ばされた。自分の痴態をまざまざと見せつけられた愛花は、羞恥に顔を隠して身悶える。
（くはぁぁあっっ、たまらん！　可愛いなぁ、愛花はっ……さすが俺の彼女！）
「きゃうぅぅっっ！　んっ、なにっ、久志っ……ふぁっ、はっ……やぁぁ……」
強く抱き締めて彼女の首筋に吸いつき、キスマークをしっかりと刻みつける。これは自分のモノ、自分の女だという証をいくつも残しながら、柔らかい芝の上に彼女を寝かせ、ショーツを完全に脱がし取る。粘液に塗れて丸まったショーツからは、甘酸っぱい湯気がホカホカと立ち上り、それがそのまま彼女の興奮を証明していた。
（それじゃ、そろそろ――って、あれ……なんでだ？）

と――そこで生じた事態に、久志の指がスカートの中で戸惑ってしまう。
ローターのコードを探り当てて引っ張るのだが、彼女の秘唇からそれが抜け落ちる感触が伝わってこない。すると――。
「んくあぁぁっ！　あひっ、やっ、ひしゃっ、しぃっ！　んっ、あぁぁっ……」
そのせいで妙な部分に振動が伝わったのか、ローターに刺激されて愛花が嬌声を響かせる。公園の外にまで響きそうなほどの大声に、久志はニヤニヤと笑いながら、彼女の耳元に口づけてささやいた。
「おいおい、ンな大声で喘いでたら、近所の奥様たちが様子見に来ちまうぞ？」
「んぁうぅぅっ……だっ、だってぇ……ひぅっ、くふぅぅっ……」
慌てて唇を引き締めて、恨みがましい目で見上げてくる愛花。そして一瞬の躊躇いを見せたあと、覚悟を決めたように瞳を固く閉じて、ゆっくりと体勢を変える。いつかのような四つん這いで、お尻を突きだした格好だ。
「こ、ここぉ……だか、らぁ……んぅっ、はっ、はぁぁ……」
スルリと衣擦れの音を立てて、スカートがめくられる。たくし上げられたその下に現れるのは、染み一つなくプリプリとした肉感を見せつける、白肌の美尻――それと。
（おいおいおいっ、マジか、これっ……愛花、お前……くぅぅっ！）
本当に信じがたいというか、なんというか。あれだけ潔癖だったはずの彼女が、まさかこんなことをしていたなんて――。

「……なぁ愛花、これはなにかな？　俺の目には、お尻の穴からコードが伸びてるように見えるんだが……ほら、説明してくれよ」
「っっっ……んっ、もっ……へ、変態っ、わかってる、くせ……にっ、ひぅっ……」
キュゥッと窄まったうっすらと朱に染まる菊皺、そこから垂れ伸びたコードをクイクイと引っ張りながら問いかけてやると、羞恥に瞳を潤ませて愛花が腰をくねらせた。
「いやぁ、変態は愛花のほうじゃないか？　だってほら、こんなとこにローター咥え込んでるなんて、普通はすることじゃないだろ。なんでこんなことしてるんだ？」
などと口では責めながらも、これまでの久志の努力が彼女を変えたというのは間違いない。だからこそ、彼女の仕草や行動が、嬉しくてたまらなかった。
「んぁっ、だ、だからっ、そぇ、は――んくぅぅっっ！　くふっ、ふぁはぁぁ……」
コード越しに振動が伝わる。この豊満な尻肉の奥で震えるローターが、彼女の菊壺を内側から苛み、そして悦ばせているのかと思うと興奮が込み上げて止まない。
（あぁっ、もうっ……そんなにしたかったのかよ、愛花！）
「ちょ、ちょっと、待ってっ……きゅぅんっっ⁉　んひっ、あっ、ひゃぅぅっ！」
調子に乗ってローターの威力を小刻みに弄ると、愛花が淫らにお尻を振り乱して、子犬の鳴き声じみた嬌声をもらす。しかもそのたびに尻皺がキュムッ、クチュッといやらしい水音を響かせて蠢き、中の器具を逃がさないように締めつける動きを見せる。
「おーおー、すげぇな。そんなにお尻で感じるくらい、自分で何回もしたのか？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

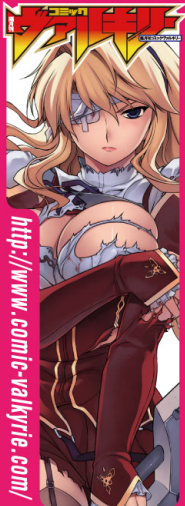
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！